

# えひめの地域づくり

## — 私が行ってきた地域づくりを中心に —

人間牧場主・年輪塾々長 若松 進一



### 【要 旨】

既に「過去」となったこれまでの地域づくりは、高度成長による発展から生ずる過疎や高齢化、産業不振、地方と田舎といった社会問題に真っ向から取り組み、自分の住んでいるまちやむらに思いを寄せながら、生きていることを実感する、ハラハラ・ドキドキ・ジーンとするようなリアルで「人間的」なものでした。

しかし2年前、突如として全世界に広がり、人命さえも危うくなりつつある新型コロナウイルスの影響で、「現在」は人と人の結びつきさえも遮断せざるを得ない、バーチャルで「非人間的」な社会へと大きく変化し始めています。さてどうなる・どうする「これからの未来を」と言われても、一度崩れた社会構造や傷んだ人間の心を元に戻すことは容易なことではありません。「昔はよかった」などと悠長な回顧主義を唱えることなどさらさらありませんが、差し当たり「不易と流行」という2つの物差しを持たなければならないと思います。

世の中には情報化のような時流を直視して変えなければならない「流行」がありますが、変えてはならない「不易」なものもあり、変えてはならないのに変えていることを一旦ゼロに戻し、再起動することが大切だと思います。これまで過去に蒔いた地域づくりの沢山の種を発芽させ、花を咲かせ実を結ばせなければなりません。そのことに気づき再び人間優先の地域づくり人が沢山現れることを期待しています。勿論私もそのひとりとなる覚悟です。

## 1 はじめに

私は18歳から77歳の今日まで約60年間の長きにわたって、まちづくりや地域づくりに深く関わって生きてきました。大まかに分けると次の4つに分けられます。

- ①社会教育での地域づくり
- ②役場職員としてのまちづくり
- ③ボランティアグループでの地域づくり
- ④人間牧場での地域づくり

これらは並行して行ってきたため分けるのが難しく言い尽くせませんが、思いつくままにこれまでを振り返ってみたいと思います。

## 2 青年団での学び

私は親父がガンで倒れたこともあって、愛媛県立宇和島水産高校漁業科を卒業後、地元に戻り家業である漁業を継ぎました。その頃の瀬戸内海は

魚も沢山獲れ、金になる時代だったため、それほど将来への不安もなく、また周りには中学校や高校を卒業した勤労青年が双海町だけでも100人もいて、町はある意味活気に満ち溢れていました。地元には青年団、農業後継者などの若者組織があり、また当時、県内では珍しい町立の女学院という花嫁修業をする女性だけの学校もあり、お互いが張り合うような形で男女の交流もあり、活発な活動を展開していました。

私は18歳の時、誘われるまま地元の青年団に入団しました。仕事と青年活動を両立させながら青年学級で知識や生き方を学び、青年団活動で自分たちの住む町をどうするか真剣に考えて活動しましたが、いつの間にか23歳で青年学級の委員長になっていました。青年学級では男女の交際は勿論のこと、色々な知識を学びました。中でも「テーブルマナー」や「ラブレターの書き方」な